

＝ 過ぎたるは・・・ ＝

ここ3カ月、出退勤に時間がかかる。なぜ？膝の故障で…。

2020年コロナ禍で出張も、懇親会もほぼなくなった頃に、週4でランニング、一時期は月に200キロを超えるほど走っていた。「無理しないで」と周囲に言われてもランナーズハイというほどの高尚なものではないけれど、なぜか走らないといけないという強迫観念にかられ走り続けた。膝が痛けりゃサポーターを、早く走れなきゃ距離を伸ばして…。そうしているうちに、膝に炎症をおこし水がたまり整形外科へ通い始めたのが2020年7月。

あれから2年、走ったり、歩いたりを繰り返していたがいよいよ右膝に痛みがはしり、レントゲン、CT、MRIの精密検査の結果、右膝軟骨片の遊離（俗に関節ネズミともいう）により炎症、腫れ、水がたまり歩行にも支障をきたすこととなった。そして、結果的には手術を要することに。しかし、悪いことは続くもので執刀医のスケジュールが取れず冒頭の3カ月の苦労プラスあとひと月、10月にならなければ手術すらできない（涙…）。ひとの助言はしっかり聞くべしと気付いたが時すでに遅し。なんとかロキソニンを持ち歩きながら、来る時を待つしかない。良く後輩の組合長に言われた、過ぎたるは及ぼざるが如し・・・身に染みんでいます。

そんな状況におかれ、出退勤では、それでなくても歩くのが早い東京の人たち、お年寄りにまで追い越される始末。人一倍、負けず嫌いの身の上にはなんとも悔しい限り。階段の昇り降り、とりわけ下りでは神官さんみたいに一段ごとに足をそろえて一歩づつ。エスカレーター、エレベーター、いまさらながらに気づいたありがたさ。ただ、下りのエスカレーターの少なさよ、せめてスロープでもあればと哀れな身の上の今日この頃。

そんな不自由な経験で共生社会という言葉思い出した。女の人でも男の人でも、お年寄りも若い人も、すべての人がお互いの人権や尊厳を大切にし、支え合い、誰もが生き活きとした人生を送ることができるようにすることを「共生社会」という。さまざまな人々が、すべて分け隔てなく暮らしていくことのできる社会であり、障害のある人もない人も、支える人と支えを受ける人に分かれることなく、ともに支え合い、さまざまな人々の能力が発揮される活力ある社会づくり。

そのためには様々なバリアがあるが、それを取り除くための具体的な行動を起こすことが肝要。だが、なかなか難しい。困っている人やその痛み気づいても、無関心であったり、無関心のふりをしたり、遠慮をしてしまったりなど、自らにバリアをつくってしまって具体的な行動が起こせない人は多いはず。思い切って、わが身に置き換え自分なら何がしてほしいか、どんなことを求めているのか、そのうえで何ができるかを考え行動を起こせばいいのだが。

ダイバーシティという言葉をよく聞くようになったが、日本社会に登場したのは2003年の日経連のレポートから。アメリカの影響を受けて最近ではインクルージョン（包摂）という言葉も含めて「ダイバーシティ&インクルージョン（D&I）」が使われるようになった。各社労使の取り組みとしても進められている。

それは多様な人材を受け入れ、その能力を発揮させる考え方であり、人材の多様性は、性別や年齢、国籍や障害の有無から働き方まで、幅広い意味を持つ。個々人が誇りを持ち、活力を発揮していくことは企業の発展にもつながる。

そうした考え方を早くから明確にしているのが基幹労連の男女共同参画活動である。「男性も女性も、性別にかかわらず、互いにその個性と能力を尊重し、生き生き働き、暮らすことのできる環境づくり」。

相手を思い、相手の立場に立って物事を考え行動に移す。労働組合役員として軸に据えておかなければならない大切なことでもある。

「ご安全に」基幹労連の挨拶もしかり。残暑厳しき折、体調管理も忘れずに。

そして、決して無理はなさいませぬように…。

ご安全に

2022年9月1日

日本基幹産業労働組合連合会
中央執行委員長 神田 健一